



Title	伝昌叱筆源氏物語古注切と『山下水』
Author(s)	松本, 大
Citation	詞林. 2014, 56, p. 12-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67671
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

伝昌叱筆源氏物語古注切と『山下水』

松本 大

一、はじめに

『山下水』は、三条西実枝による『源氏物語』の注釈書である。本書は、実隆より続く三条西家源氏学の集大成と位置付けられる書であるが、現在は零本のみが数冊伝わるに過ぎない。

『山下水』に関する先行研究としては、早くに伊井春樹氏が、三条西家における源氏学の展開を明らかにしつつ、『源氏物語』注釈史における位置付けを行っている¹⁾。また、体系的な研究を行った榎本正純氏の『源氏物語山下水の研究』²⁾によって、一部ではあるものの、その様相を具体的に把握出来るようになった。しかし、先述のように、現存する『山下水』は、二十五の巻しか残されておらず、その実態は不分明のままにある。

本稿では、その『山下水』の断簡の可能性を持つ伝昌叱筆源氏物語古注切(架蔵)を紹介し、失われてしまった三条西家源氏注釈書の全容解明の一助としたい。

二、伝昌叱筆源氏物語古注切について

まず、伝昌叱筆源氏物語古注切(以下、古注切)の書誌を示す。

縦25・1cm・横19・2cm。楮紙。一面11行書き。字高は、縦約21cm・横約17・5cm。室町時代末期から江戸時代初期の写か。古筆宗家三代の古筆了祐の極札があり(鑑定日時は天和二年(一六八二)十一月)、伝承筆者を里村昌叱とするが、昌叱の手とは認められない。『源氏物語』注釈書の切であり、蓬生巻の冒頭近くの注記を記す。⁴⁾

連年師昌叱

マハ定成はく



連年師昌叱

マハ定成

女果成はくくのも多事あり又す忍の初

二とをりこふららふるめ流くとありす忍る

豊よりありわふもわ但も忍事と書くは計也

とくなくつていひ流くちとて 河海

初年 且くうふふあふりてははひはねつてはさくは

再花 初年并をりて源氏友は乃時の事と

かきり女又歳六七果の事よりかきり

一切くわひいそむくちをたより

花鳥 源氏乃君とてははひはねつてはさくは

くわとより流くちのわさくは 河海

わりのさくは流くちのわさくは 河海

翻刻は、以下の通りである。

廿八歳みをつくしのすゑの事あり又すゑの詞に

二とせはかりこのふる宮になかめ給てとありすゑは

豎になりぬるにや但すゑの事を書たる斗也

行平もしほたれつ、わひ給しころをひ

河海

わくらははにとふ人あらはすまのうらにもしほたれつ、わふとこたへよ

弄花 行平哥をもて源氏左遷の時の事を

かけり廿五歳六七歳の事よりかけり

一かたのおもひこそ心くるしけなりしか

花鳥 源氏の君にはなれ給なけきはかりなり

くらゐをさり給へるかりの御よそひをも

かりのよそひ旅の装束也かりそめのこゝろ也

河海

注記中に「河海」「花鳥」「弄花」とあるのは、『河海抄』『花

鳥余情』『弄花抄』を指す。確認のため、この三書における

該当部分を以下に示す。

『河海抄』

滯標並一 蓬生

此卷中無蓬生之詞惣常陸宮旧跡蓬競簷而生昇ト見タ
リ哥にしけきよもきの露のかことをと詠之蓬生同事

也

蓬生事 杜詩曰蓬生非無限漂蕩隨高風天寒万里不復

婦本叢客子念故宅三年門巷空

此詩心詞自相通乎

いかてかく尋きぬらんよもきふの人もかよはぬわか

宿のみち拾遺

もしほたれつ、わひ給しころを

わくらはにとふ人あらはすまの浦にもしほたれつ、
わふとこたへ（古今）

くらのをさり給へるかりの御よそひをも竹のこのよのう
きふしをも

かりのよそひ旅の装束也かりそめの心也

今さらになにおひいつらん竹のこのうきふししけき

世とはしらすや（後撰）

『花鳥余情』

並一 蓬生

以詞並歌為卷名 詞云えわけさせ給ふましきよもき
ふの露けさになん侍るとあり 歌にはしけきよもき
のとあり これは横の並也 源氏の廿七八歳の事見
えたり さりながら蓬生の君の始終をかきあらはず
によりてはしめは源氏の須磨へうつり給て帰京の事
をかきおはりには又二とせはかりふる宮になかめ給
て二条のひんかしの院につみにうつり給ふ事をのせ
たり これは物かたりの家にかきそへたる事也 本
意はまさしくよもきふのやとをたつね給て露わけ給
ひし事源氏の廿八の四月の事也 これをもて横の並
にはとれる也

一かたの思こそ心くるしけなりしか

源氏の君にはなれ給ふなけきはかり也

たけのこのよのうきふし

薄雲女院は東宮をもち給てなくさみ給ふをいふにや
『弄花抄』（七）

蓬生

卷名 以詞哥号之

此卷は横の並也源氏廿七歳事八講みをつくしなどの
事より廿八歳みをつくしの末の事有又末の詞にふた
とせはかり此ふる宮になかめ給てと有末は堅に成ぬ
るにや但末の事を書たる計也

もしほたれつ、

行平哥をもて源氏左遷の時の事を書り廿五六七のよ
りかけり

竹のこのよのうきふしを

この世のうきふしといはんとて竹のと置たる事也

面白く

傍線部が古注切と対応する箇所である。点線部に若干の差異
があるものの、各書からの引用と断定出来る。また、見出し
本文が引用元の注釈書と同一であることから、見出し本文ま
でも引用元の注釈書に拠っていたことが窺える。

そして、古注切の注釈が『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』
の三書を中心に成立していることも見て取れる。あくまで当
該部分のみの事象かもしれないが、この三書に重点をおいて
注記編集が行われている点は、古注切の特徴の一つと位置付
けられる。

『弄花抄』を用いていることから、古注切が『弄花抄』以後の源氏注であることは明らかではあるものの、具体的な書名は不明である。そこで次節では、『弄花抄』以後の各注釈書の注記内容を比較することで、古注切の実態に迫ることとする。

三、注記比較

今回比較に用いた注釈書は、『細流抄』『浮木』『明星抄』『休聞抄』『林逸抄』『紹巴抄』『孟津抄』『花屋抄』『岷江入楚』の九書である。これらと古注切を比較したところ、完全な一致を見せるものは存在しなかった。ここから、古注切には、現在では失われてしまった注釈書である可能性が浮上する。

ここで、注釈内容を検討してみたい。先に示したように、古注切には、巻名と物語の時間軸に関する注記、「もしほたれつ、わひ給しころをひ」の注記、「一かたのおもひこそ心くるしけなりしか」の注記、「くらゐをさり給へるかりの御よそひをも」の注記、以上の四注記が存在する。これらの注記について、各注釈書を踏まえた細かな検証を加える。

まず、古注切の冒頭部分は、文言の一致により、『弄花抄』の注記を引用したものと判断出来る。巻名や物語内の時間軸に関する巻冒頭の注釈は、各注釈書で様々に行われるが、この中で『弄花抄』を引用するのは『休聞抄』『岷江入楚』のみである。

「もしほたれつ、……」に注記を施す注釈書は、先に挙げた諸注釈書のうち、『浮木』を除くすべてである。この中で『休聞抄』『林逸抄』『紹巴抄』『孟津抄』『岷江入楚』が、『河海抄』指摘の引歌と『弄花抄』の注釈の両者を併記する。ただし、冒頭に『河海抄』を挙げ、次に『弄花抄』を示すものは、『孟津抄』『岷江入楚』のみである。さらに、『孟津抄』には出典肩付が付されていないのに対し、『岷江入楚』の肩付は古注切と同様に注記冒頭に施されている。

「ひとかたの思ひ……」に注釈を施したものは、『休聞抄』『孟津抄』『岷江入楚』である。見出し本文は、『休聞抄』が「一かたの思ひにこそ」と短縮しているのに対し、『孟津抄』『岷江入楚』では「さてもわか御身のより所あるは」が上接している。『花鳥余情』や古注切が持つ見出し本文と一致する注釈書は無いものの、唯一『岷江入楚』だけがこの箇所には『花鳥余情』注記の引用を行うのである。¹⁰⁾

「くらゐをさり給へる……」の項は、『孟津抄』『岷江入楚』のみが注記を持つ。この注記は『河海抄』注記の前半部分による。『河海抄』では、見出し語本文が「くらゐをさり給へるかりの御よそひをも竹のこのよのうきふしをも」となっており、注記には「竹のこのよのうきふしをも」に対応する引歌注記も存在する。しかし、『花鳥余情』以降の注釈書では「竹のこのよのうきふしをも」に対する注釈のみが取り挙げられる傾向にあり、先に指摘した『孟津抄』『岷江入楚』に至る

まで、「くらゐをさり給へるかりの御よそひをも」の注釈はほとんど顧みられて来なかつた。『河海抄』の注記と、『孟津抄』『岷江入楚』の注記を比較すると、『孟津抄』は『河海抄』をそのまま引用するに留まるのに対し、『岷江入楚』では引用後に「源の除名の事なるへし官位をとられたる人の装束也」の注釈が入る。これは『河海抄』諸本においても見られないことから、『岷江入楚』が私説として付したものと考えられる。

以上のように、古注切が示す四注記をすべて内包する注釈書は『岷江入楚』のみであり、注釈の範囲や方法においても類似点が見られる。古注切の注記は、『休閒抄』や『孟津抄』とも類似する点を有するが、それぞれに存在しない注記を古注切が持つことから、これらとの直接的な影響関係は想定出来ない。今、『岷江入楚』より「もしほたれつ、……」から「くらゐをさり給へる……」までの注記を挙げると、以下の通りである。

『岷江入楚』

もしほたれつゝわひ給し比ほむ

河行草わくらはにとふ人あらはすまの浦にもしほたれつゝわふとこたへよ

弄源氏左遷の時の事をかけり 廿五六七才よりの事をかけり

私これはひたちの宮未摘也の事をかきいたさむとて

源のすまのうつろひの事をかきいたせり 是は大方の事をかくいひ出したる也

さてもわか御身のより所あるはひとかたの思ひこそ

われくゝとより所ある人は源にわかれ給なけきはかり也 それを一かたのおもひといふ也 花源氏君に

はなれ給ふなけき也

二条のうへなとも

紫上也

たひの御すみかをも

紫は本さいのやうなれば別べつしてのなけき也 されともそれは又旅居のさまをも折く聞かよひてもなく

さむる也

くらゐをさり給へるかりの御よそひ

河がりのよそひ旅のさうそく也 かりそめの心也

源の除名の事なるへし 官位をとられたる人の装束也

ゴチックで示した部分が、古注切と一致する部分である。

注目すべきは、『岷江入楚』が独自に付したと考えられる注釈部分である。先に指摘した「くらゐをさり給へる……」

の注記以外に、「もしほたれつ、……」の注記においても、「私」と私説であることを示した上で注釈を行っている。また、「さてもわか御身のより所あるはひとかたの思ひこそ」の注記においても、『花鳥余情』引用の前に示された「われくゝとよ

り所ある人は……」の部分は、肩付等は存在しないものの、『岷江入楚』によって施された注記である。

このように古注切と『岷江入楚』を比較すると、『岷江入楚』の注釈が、ゴチック部分の古注切を基盤に、そこに私説を加える形で編纂されていったことが窺えるのである。当然のことながら、古注切に見られない注記が『岷江入楚』に存在するように、『岷江入楚』の編集には複数の注釈書が用いられたのではあるが、当該箇所の注記に関しては、他の注釈書以上に古注切との強い関係性が指摘出来よう。

現在では散逸してしまいがちながら、『岷江入楚』との強い関連が存在する注釈書と言えば、まっさきに思い出されるのは『山下水』である。『岷江入楚』の編纂については、三条西公条の『秘抄』とその子実枝の『山下水』を基盤として成ったことが、伊井春樹氏によって明らかにされている。特に、『山下水』との関係については、『岷江入楚』が料簡で言及した巻以外にも『山下水』を利用していることを確認した上で、

『山下水』と通勝の注釈との影響関係は、これまで引いてきた資料に限るのではなく、全体について指摘することができ。それは個々の注記内容が重なるといったレベルの問題ではなく、『岷江入楚』のあり方そのものが、『山下水』を根底的に継承しているということである。右にいくつか示したように、通勝は明らかに『山下水』に依拠しながら、「箋」の肩付けをしないで、過去の注

釈書の配列や引用部分は変らなくても、あくまで『河海抄』や『花鳥余情』『弄花抄』などを独自で引用したスタイルにしている。事実彼は出典の注釈書を再度見直して書き込んだはずで、結果は一致していても、その過程はたんなる書写とは異なる手続きの迂回があった。

と、『岷江入楚』の注釈姿勢にまで影響を与えたことを指摘する。伊井氏は、さらに『山下水』は、さながら『岷江入楚』の一次的、あるいは原形的な性格すら持っていたと言える」と述べたが、今回取り扱った古注切は、まさに『岷江入楚』の原形的な側面を持つ注釈書である。この点を重く見るならば、古注切を『山下水』断簡と認定しても差し支えないのではないか。

残念ながら、現存する『山下水』には、当該の蓬生巻は存在しない。そのため、古注切との注記比較は行えず、古注切が『山下水』の断簡であるかどうかの確証は得られない。しかし、『岷江入楚』との近似が、他の古注釈書から群を抜いて多い点からは、古注切が『山下水』断簡である可能性は捨て難い。少なくとも、『岷江入楚』編纂に関わった注釈書、もしくは影響を与えた先行注釈書と位置付けることは出来る。『岷江入楚』編纂の初期段階を窺うに際して、古注切が『山下水』の断簡であろうとかなろうと、その資料的価値は少なからざるものと言えよう。

四、まとめ

以上、本稿では古注切の紹介を兼ねて、『岷江入楚』の編集に関わる『山下水』の問題に触れた。古注切は、今日では知ることの出来ない注釈書の様相を持つ。その点と『岷江入楚』との共通点を以て、古注切を『山下水』と認定することが、あくまで希望的観測でしかないことは十分承知の上である。しかし、『岷江入楚』編纂に、現在では見ることも出来ない注釈書が介在したであろうことは否めない。この点を詳らかにするためにも、まだ見ぬ『山下水』の搜索が求められる。

なお、古注切についてはツレの存在が期待されるが、管見の限りでは探し出すことが出来なかった。ツレとおぼしき古筆切をご覧になった方は、是非ご連絡いただきたい。諸賢のご指導ご教導を賜りたい。

注

(1) 伊井春樹「『山下水』から『岷江入楚』へ」（『源氏物語注釈史の研究 室町前期』、桜楓社、一九八〇。初出「『山下水』から『岷江入楚』へ——実枝の源氏物語研究とその継承——」（『国語国文』第46巻第8号、一九七七・八）。

(2) 榎本正純『源氏物語山下水の研究』（和泉書院、一九九六）。

(3) 前掲注(2)の榎本氏によると、各伝本で残巻する巻は、以下の通り。

宮内庁書陵部蔵本……桐壺・帚木・空蟬・夕顔・若紫・末摘花・紅葉賀・花宴・初音・胡蝶・虫・常夏・篝火・野分・行幸・若菜上・若菜下・夕霧・御法・幻・匂宮・紅梅・竹河

天理図書館蔵甲本……桐壺・帚木・空蟬・夕顔・若紫・末摘花・紅葉賀・花宴・若菜上・若菜下・夕霧・御法・幻・匂宮・紅梅・竹河

天理図書館蔵乙本……空蟬・夕顔・若紫・末摘花・紅葉賀・花宴・葵・賢木・初音

また現存本には通村等の説が入り込んでおり、純粋な『山下水』かどうか疑問が残る。

(4) 『源氏物語』蓬生巻の冒頭は、以下の通り。本文は、新編日本古典文学全集（小学館、一九九五）に拠る。傍線部は、古注切の見出し本文と対応する箇所である。

藻塩たれつわびたまひしころほひ、都にも、さまざまに思し嘆く人多かりしを、さてもわが御身の拠りどころあるは、一方の思ひこそ苦しげなりしか、二条の上などものどやかにて、旅の御住み処をおぼつかかなからず聞こえ通ひたまひつ

つ、位を去りたまへる仮の御よそひをも、竹の子の世のうき節を、時々つけてあつかひきこえたまふに、慰めたまひしむ、なかなか、その数と人にも知られず、立ち別れたまひしほどの御ありさまをもよそのことに思ひやりたまふ人々の、下の心くだきたまふたぐひ多かり。

(5) 『河海抄』の本文は、便宜的に玉上琢彌編『紫明抄河海抄』角川書店、一九六八)に拠った。

(6) 『花鳥余情』の本文は、中野幸一編『花鳥余情源氏和秘抄源氏物語不審条々源語秘訣口伝抄』(源氏物語古註釈叢刊第二巻、武蔵野書院、一九七八)に拠った。

(7) 『弄花抄』の本文は、伊井春樹編『弄花抄付源氏物語開書』(源氏物語古註集成第八巻、桜楓社、一九八三)に拠った。

(8) 「こ、ろを」の部分、A・C類諸本では「ころほひ」となっており、また物語本文についても「ころほひ」で異同はない。こは『河海抄』B類系統に見られる異文と考えるべきであろう。

(9) 以下、『弄花抄』以降の代表的な注釈書を示す。ゴチックで示した部分は、古注切と一致する部分である。

【細流抄】

巻名よもきふとつ、きたる語はなきなりよもきと云事詞にも哥に見えたり花鳥にはえわけさせ給ましきよもきふの露けさになむとありふつうの本にはた、よもきの露けさとある也横の並也みをつくしの巻の事もあり源氏廿七歳の事八講などの事より廿八歳の四月此宮をとり給事あり又末は絵合の末までの事あり末は豎になる也悉皆ひたちの宮の始終をかける也もしほたれつゝ

行平朝臣哥をもちて須磨のさせんの事をかける也廿五六歳の

事をかけり
我が御身の

先人くゝの御うへを云也
たけのこのよ

只此世のうきふしといはんため也此物語のほひおもしろし古今序むれ木の人しれぬこと、なりなるといへる文体花説いか、此段は悉皆紫上をいへる也

【浮木】

わか御ありさまのより所あるは
是は常陸のひめ宮のおほえぬさいわひとりはつし給て後より
より所なき事いはん為也

【明星抄】

巻ノ名詞并歌よもきふとつきたる語はなき也。よもぎと云事詞にも歌にもみえたり。花鳥にはえわけさせ給ましきよもきふのつゆけさになんとあり。普通の本には唯よもぎの露けさとある也。横の並也。みをつくしのさきの事もあり。源氏廿七歳の事八講などの事より廿八歳の四月此宮を問給事有。末は絵合の末迄の事あり。末は豎になる也。悉皆常陸宮の始終をかける也。又末の詞に二とせばかり此ふる宮になかめ給ふと有。末は豎に成ぬるにや。但末の事を書たる計也

もしほたれつゝ

行平の歌を以て源氏の須磨の左遷の時の事を書く也 廿六七

我が御身の

先人くゝの御うへどもを云也

たけのこのよ

只此世のうきふしといはんとして竹のとをきたる計也
物部には世に世に、古今序むもれ木の人のしれぬ事となりてなどいへ
面白し、
文也也、花鳥説如何 此段は悉皆紫上をいへる也

【休聞抄】

以詞并哥為卷名詞にはえわけさせ給ふましき蓬生の露のしけ
きになむ侍るとあり哥にはしけよもきのとあり是は横の並
也源氏の廿七才の事みえたりさりながら蓬生の君の始終を
書あらはずによりてはしめは源氏のす磨へうつり給て帰京の
事を書終には又二とせはかり古宮になかめ給て二条のひんか
しの院につみにうつり給事をのせたり是は物語に書そへたる
事也本意はまさしくよもきふの宿を尋給て露分給し事源氏の
廿八才の卯月の事也是を以て横の並にはとれる也此卷は横
並也源氏廿七才事八講落標卷に有などの事より廿八才みをつく
しの末の事有又末の詞に二とせ斗此宮に詠給てとあり末は豎
に成ぬるにや但末の事書たる斗弄

もしほたれつゝ

行平哥を以て源氏左遷の時の事をかけり廿五六才の事よりか

けり弄 引わくらはにとふ人

一かたの思ひこそ

身のたのみ所有は源氏の須磨への別斗嘆給と也

二条のうえ

紫上也

竹のこの

薄雲女院は春宮をもち給てなくさみ給をいふにや花このよの
うきふしとはいはむとて竹のと置たる斗也面白く 弄 引今

【林逸抄】

更に何おひ出らん竹の子のうきふししけ世とはしらすや河
卷の名ハ詞と哥をもつて号す詞にハえわけさせ給ふましき
よもきふの露のしけきよもきのもとをこしとあり是ハ横の並
とはめ道もなくしけきよもきのもとをこしとあり是ハ横の並
也源氏の君廿七才の事見えたりミをつくしの卷の末ハ廿八
歳の十一月はかりまての事あり此卷に御八講などの事あり是
ハみをつくしの同時廿七才の十月ハかりの事也よもきふの宿
を尋給て露わけ給ふ事ハ源氏廿八才の卯月の事也是をもつて
横の並とはとれる也花鳥にも横の並とめされたり又末の詞に
二とせより此古宮になかめ給て東の院といふところになん後
にハわたし奉り給けるなどあり然間末にてハ豎になりぬるに
やさりながらよもきふの君の始終を書あらハすによりてはし
めハ源氏のすまへうつり給て帰京の事を書終には又二とせは
かり古宮になかめ給て二条のひんかし院につみにうつり給事
をのせたり是ハ物語の家に書そへたる事也末の事を書たるハ
かり也

もしほたれつゝ

行平の哥を以て源氏左遷の時の事をかけり廿五六才の事より

書り源氏のすまにての事也引わくらはにとふ人あらハすまの

浦にもしほたれつゝわふとこたへよ

さては我身のより

源しの詞也身のたのミところあるハ源しの須磨への別はかり

一かたに嘆給ふと也

二条のうへ

紫上の事也源しのすまへの御出の事をもよく御存知あり

たるほどにたひのかりの御よそひとてかりきぬなとして奉り
なとしてのとかに別給ひしを嬉しく源しの思召心也

竹のこのよの

このよのうきふしと云んとて竹のと置たるはかり也面白し
〈引今更に何生出らん竹の子のうきふししけき世とはしらすや後撰河海 花鳥にハ竹の子薄雲の女院ハ春宮をもち給てなくさミ給をいふにやとあり如何

【紹巴抄】

哥も詞にもよもきふとはなし 夢とはかりはいひかたさに夢
の浮橋といふかことし 漢語にも逍遙とあるへきをせうよう
遊と篇号云々

此巻横の並也 濔標のまへのことあり 源氏廿五六七才の事
あり 末の詞に二とせはかり此古宮になかめ給てとあり 末
は豎に成にや ひたちの宮の始終を此巻にかけり 物語の一
の文体也 面白く 蒿菜生古宮
もしほたれつゝ

廿五歳左遷の時の事をかけり 行平の哥に わくらははにとふ
人あらは須磨の浦にもしほたれつゝわふとこたへよ

さてもわか御身の

一かたの思ひは須磨への別の歌はかり也 諸事たよりとたの
み給ひしことをかけり

竹のこのよの

この世のうきふしといはん用はかりに竹といへり 面白云々
今更に何生出んたけの子のうきふししけき世とはしらすや
古今序に埋木の入しれぬなど、かける文体歟

【孟津抄】

以詞并歌為卷名よもきとつゝけたる詞はなしえわけさせ玉ふ
ましき蓬生の露けさになん侍るとありよもきとはいはれぬに
よりに蓬生となり哥には

たつねても我こそとはめ道もなきふかきよもきのもとの
こゝろを

とありこれは横の並也源氏廿八歳の事みえたりさりながら蓬
生君の始終をかきあらはずによりてはしめは源のすまへうつ
り玉て帰京のことを書てをほりにては又蓬生の君二とせはかり
ふる宮になかめ玉ふて二条の東院につゝり玉ふ事をの
せたりこれは紫式部かきそへたること也本意はまさしくよも
きふの宿を尋て露わけ給しこと源廿八の四月のこと也これを
もて横の並にはとれり其人のことをいふにつきて横の並に別
書也

蓬生事 杜詩曰

蓬生非無根 漂蕩隨高風 天寒落万里

不復歸本叢 客子念故宅 三年門巷空

いかてかくたつねきつらむよもきふの人もかよはぬ我やと
のみち

もしほたれつゝわひ給しころほひ

わくらははにとふ人あらはすまのうらにもしほたれつゝわふ
とこたへよ

此哥にて源左遷の時のことを書き廿五六才のことより書り

さてもわか御身のより所あるはひとかたの思ひこそくるしけなり
しか

た、好色のうへはかりにてたのみ所ある人とはすまへ御うつ
りの事はかりを一すちにわひ給也源はかりを頼たる人たちは

さま〜おほしなげく也
二条のうへなども

これも源はかりをたのみたる人なれと内証自由なれば細々す
まへ音信あり別段の事也

くらゐをさり給へるかりの御よそひ
かりのよそひ旅の装束也かりそめの心也

竹のこの世の

いまさらになにおひ出らむ竹の子のうきふししけき世とは
しらすや

世のうきとはいはんとてはかりに竹のこのよとの事をかけり
紫上の心は此分まで也花鳥説大に誤也

花鳥薄雲女院は東宮をもち給てなくさみ玉ふをいふにや

誠心其誤いか、み給しにや

『花屋抄』

此まきの名の哥

たつねても我こそとはめみちもなくふかきよもきのもとの心
を

源氏廿九歳四月の比の事也されともすゑつむ花の始終をか、
んとて源氏うつり給しよりの事をこゝにかきたれはよこたて
をかねたるならひ也すまのまきにつゝけんためにもしほたれ
つゝとかきはしめたり哥数六首

もしほたれつゝわひ給し

わくららにはとふ人あらはずまの浦にもしほたれつゝわふとこ
たへよ

竹のこのよのうきふしを

此ことは花鳥には女院の御ことにやとありさやうにはきこ

え侍らすたゝむらさきのうへの御事までにごゝのことははき
こえたりこの世といはんとて竹をいひてうきふしとつゝけた
り哥のよみやうみなかくのことしみなことはの花なり古の哥に
世の中はこのはしけきくれ竹のうきふしことにくひすそ
なく

『岷江入楚』

蓬生

并一 以哥并詞為卷名、但蓬下ハカリ有テ蓬生トツケタル詞はなし

花詞云えわけさせ給ふまじき蓬のつゆけきになん侍とあり

哥にはしけきよもきのことあり 河此卷中無蓬生之詞 惣常陸

宮旧跡蓬競簷而生昇とみえたり 哥にしけきよもきものと

心をと詠せり 蓬生同事也

蓬生事 杜詩曰 蓬生非無根 漂蕩隨高風 天塞落万里 不

復歸本叢 客子念故宅 三年門卷空 此詩の心自相通乎

拾いかてかく尋きつらん蓬生の人もかよはぬわかやとのみち

聞此物語の卷名になき事をそへていへるおほし 是毛詩の名

篇例にもあり 此物語には夢のうきはし夢とはかりありてう

き橋はなし 莊子の逍遙遊も遊の字はそへたる也

並事 花横の並也 源氏廿七八才の事みえたり さりなから

蓬生の君の始終をかきあらはずによりてはしめは源氏のすま

へうつり給て帰京の事をかき終には又二とせはかりふる宮に

なかめ給て二条の東の院にうつり給ふ事をのせたり これは

物語の家にかけそへたる事也 本意はまさしくよもきふの宿

をたつね給てつゆ分給し事源氏廿八才の四月の事也 是をも

て横の並にはとれる也 弄此卷は横の並也 源氏廿七才の事

八講にありに事なとより廿八才の末の事あり 又末の詞に二と

せはかり此ふる宮になかめ給てとあり 未は豎に成ぬるにや

但末の事を書たる斗也 聞書横置の並也 或御説によもきふの巻とはいはれぬほとに蓬生といふ 並といふはその人ひとりの事をいふ あまたの説不用之 私並の事当流一人くくの伝記の義を用ふ これにて心得やすき也 此巻は末摘花の君の伝也 しかれば源すまの御うつろひの事から二条のひんかしの院へ末摘のうつり住給ふ事までをかける也 そのうちにふかき逢のつゆを分て源の間より給へるは源廿八才の時の四月也 此事此巻の詮たるゆへに名とすると心得へし
もしほたれつゝわひ給し比ほひ

河^平わくらははにとふ人あらはすまの浦にもしほたれつゝわふとこたへよ

弄源氏左遷の時の事をかけり 廿五六七才よりの事をかけり 私これはひたちの宮^{末摘也}の事をかきいたさむとて源のすまのうつろひの事をかきいたせり 是は大方の事をかくいひ出したる也

さてもわか御身のより所あるはひとかたの思ひこそ
われく〜とより所ある人は源にわかれ給なけきはかり也 それを一かたのおもひといふ也 花源氏君にはなれ給ふなけき也

二条のうへなとも
紫上也

たひの御すみかをも

紫は本さいのやうなれば別^{べつ}してのなけき也 されともそれは又旅居のさまをも折〜聞かよひてもなくさむる也

くらゐをさり給へるかりの御よそひ

河^平かりのよそひ旅のさうそく也 かりそめの心也 源の除名の事なるへし 官位をとられたる人の装束也
竹のこのよのうきふし

弄此世のうきふしといはんとて竹とをきたる斗也 面白く薄雲女院は東宮をもち給てなくさみ給をいふにや
私花鳥の義あやまれり 弄ノ義よし 聞書 今更に何おひいつらん竹のこのうきふししけきよとはしらすや 拾遺なよ竹のわか此よをはしらすしておほしたてつとおもひつるかな
或御説に竹のこのよとは古今の序にむもれ木の人しれぬなと、いふかことし 只うきふしといはん為也 花鳥の説わろし

この他にも、『源氏物語古註（山口県文書館蔵右田毛利家伝来本）』『源義弁引抄』『萬水一露』とも比較したが、一致するものは存在しない。なお、各注釈書の本文は以下に拠った。

『細流抄』……伊井春樹編『内閣文庫本細流抄』、源氏物語古注集成第7巻、桜楓社、一九八〇。

『浮木』……中野幸一編『源氏秘義抄源氏最要抄浮木源氏抄紫塵愚抄』、源氏物語古注釈叢刊第5巻、武蔵野書院、一九八二。

『明星抄』……中野幸一編『明星抄種玉編次抄雨夜談抄』、源氏物語古注釈叢刊第4巻、武蔵野書院、一九八〇。

『休閒抄』……井爪康之編『休閒抄』、源氏物語古注集成第22巻、おうふう、一九九五。

『林逸抄』……岡寛偉久子編『林逸抄』、源氏物語古注集成第23巻、おうふう、二〇一〇。

『紹巴抄』……中野幸一編『紹巴抄』、源氏物語古注釈叢刊第3巻、

武蔵野書院、二〇〇五。

『孟津抄』……野村精一編『孟津抄』、源氏物語古注集成第4～6巻、桜楓社、一九八〇～八二。

『花屋抄』……祐徳稻荷神社中川文庫蔵本

『岷江入楚』……中野幸一編『岷江入楚』、源氏物語古注釈叢刊第6～9巻、武蔵野書院、一九八六～二〇〇〇。

(10) なお、『岷江入楚』の「花」注記は注記末尾を「なげき也」とするが、本来『花鳥余情』の注記は「なげきはかり也」である。古注切も「なげきはかり也」を取る。この箇所は『岷江入楚』における誤脱を考えるべきであろう。

(11) 前掲注(1)。

(12) 『岷江入楚』から、先行注釈書の部分のみを抜き書きした可能性も捨てきれないが、例えば、『岷江入楚』「くらみをさり給へる……」では、「河」の肩付がどこまでの範囲を示すかは一見して分かりにくく、『河海抄』注記のみを抽出することは困難である。「二かたのおもひ……」の注記における見出し本文の差異についても、『岷江入楚』を基盤にしたとは考えにくい。また、先行注釈書部分のみを『岷江入楚』より切り出す意図が見えないことから、現段階では、古注切が『岷江入楚』よりも先行する、としておく。

(13) 榎本氏は、前掲注(2)の論考で、初音巻の注記を比較検討し、通勝が注記編集の初期から『山下水』を最大限利用していた可能性を指摘している。これによるならば、蓬生巻の状況を見るに、古注切が『山下水』であることを補強するものである。

(14) 現存『山下水』を確認すると、『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』の肩付は、「可」「中」「玉」と略号を用いている。これに対し、

古注切は「河海」「花鳥」「弄花」と書名を略さずに本文と同じ大きさで示している。現存『山下水』においても、ごくまれに

そこはかとなき虫の声く、

花鳥此時節ヲ六月云々只五末也そこはかの詞文明二虫ノ
鳴二非ス也
(書木巻)

と、注釈書名を略号ではなく、注記冒頭に本文と同じように記す場合もある。もし、古注切が『山下水』の断簡であるならば、古注切の本文は現存本とは異なる系統のもの、もっと踏み込んで言うならば、丁寧に清書された本であった可能性も指摘出来る。なお、伊井氏は、「通勝の所持していた『山下水』は、整理される以前の草稿本であった」(前掲注(1))とする。

(まつもと・おおき 本学大学院博士後期課程)